

ハンセン病史はいかに教訓とされたか

桑 畑 洋一郎

1 はじめに

1.1 研究の背景と問い

本稿は、ハンセン病問題がコロナ禍においていかに想起されたか分析することにより、ハンセン病をはじめとした、社会的にある程度共有された歴史の「教訓」化のプロセスを考察することを目的とするものである。

2020年1月に新型コロナウイルスが確認され、その後日本国内でも感染者が確認されるに至り、何度かの感染の「波」を経験しながら、現在に至っていることは周知の通りである。あらためて日本における陽性者を、陽性者数の累積図を通して確認すると以下の通り2022年10月25日時点で累積陽性者数は22,055,832人となり、いわゆる「コロナ禍」も既に3年近くが経過しようとしている。

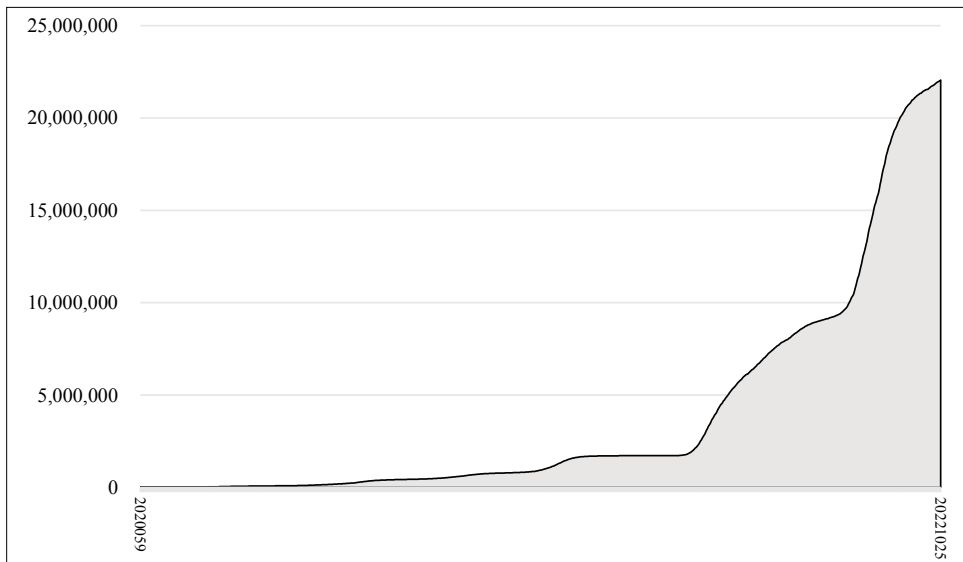


図1 2022年10月25日時点までに確認された陽性者数（累積）
（厚生労働省 2022）を元に筆者作成

他方、新型コロナウイルス感染症にも関連し、コロナ禍においてもそのあり方が議論されることがしばしばあった（例えば2022年10月26日付朝日新聞）、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」の前文には、以下のような記述がある。

人類は、これまで、疾病、とりわけ感染症により、多大の苦難を経験してきた。ペスト、痘そう、コレラ等の感染症の流行は、時には文明を存亡の危機に追いやり、感染症を根絶することは、正に人類の悲願と言えるものである。医学医療の進歩や衛生水準の著しい向上により、多くの感染症が克服されてきたが、新たな感染症の出現や既知の感染症の再興により、また、国際交流の進展等に伴い、感染症は、新たな形で、今なお人類に脅威を与えている。一方、我が国においては、過去にハンセン病、後天性免疫不全症候群等の感染症の患者等に対するいわれのない差別や偏見が存在したという事実を重く受け止め、これを教訓として今後に生かすことが必要である。このような感染症をめぐる状況の変化や感染症の患者等が置かれてきた状況を踏まえ、感染症の患者等の人権を尊重しつつ、これらの者に対する良質かつ適切な医療の提供を確保し、感染症に迅速かつ適確に対応することが求められている。ここに、このような視点に立って、これまでの感染症の予防に関する施策を抜本的に見直し、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する総合的な施策の推進を図るため、この法律を制定する。(感染症法前文より)

すなわち、感染症法の制定目的の基盤には、ハンセン病等をめぐって「患者等に対するいわれのない差別や偏見が存在した事実」を「教訓」とすべきという理念が存在しており、そうした理念の下で感染症予防等をめぐる施策が展開されることとなっている。

このように、ハンセン病をはじめとした、問題含みな過去の諸事象が、現在生じている事態を理解し、対策を導き出すものとしての「教訓」となるはずであり、「教訓」となるべきであるとするのが、法のレベルでは示されている。

それでは実際に、過去の諸事象がどのように「教訓」とされるのか。このことを、特にコロナ禍におけるハンセン病の「教訓」化の分析から考察することが本稿の目的である。なお本稿で言う「教訓」とは、国語辞典的な定義である「教えさとすこと。また、その言葉」(『広辞苑第七版』)といったものよりはやや幅広く、過去の事象が現在生じている事態を理解するために、あるいは現在生じている事態への対策を講じるために想起され参照されること、とする。国語辞典の定義には「教訓」を示す主体が想定されているため、そうした主体の存在を除外して、過去の事象が想起される実態を広く把握するためにこうした定義を採用した。

1.2 先行研究

従来、ハンセン病史を焦点とした研究においては、ハンセン病史の実態解明に重きを置いた研究が多い。また特にそうした研究も方向性でいくつかのものに分けられる。

第1は、藤野豊に代表されるような、日本のハンセン病政策の非人道性と、それによる患者らが経験した人権侵害の歴史を指摘するもの（藤野 1993, 2001）であろう。藤野を代表とした研究により、日本におけるハンセン病史の問題含みな実態解明がなされ、またこうした研究が明らかにしたことが、日本におけるいくつかのハンセン病関連訴訟においても参照されることとなっていた。

他方では、人権侵害の歴史とは異なる歴史的事実の解明を目的とした研究も存在する。そうしたものの代表例としては、個々のハンセン病関連制度に着目し、その時代的背景から制度の趣旨を分析した猪飼隆明（2016）や、患者や療養所と地域社会との関連性を明らかにした廣川和花（2011）や、患者の自治会運動の歴史的事実とその意義を明らかにした松岡弘之（2020）が挙げられる。また、社会学的な研究からは、蘭由岐子（2017）をはじめとして、患者や職員が、ハンセン病とともに個々の生活をいかに送り、それによって総体として何が起きていたのか、ハンセン病を地域社会や全体社会の中に位置づけて理解しようとする試みも多く蓄積されてきた（他には例えば（中村 1997, 2010, 2012, 2020; 坂田 2012; 桑畑 2013; 青山 2014; 有蘭 2017; 山田 2020; 鈴木 2020）など）。

以上のように、日本においては、日本のハンセン病史や、その中で存在してきた諸問題についての実態解明を目的とする研究が、これまでは主として展開されてきた。他方で、そうした研究を通して明らかにされたことも含めて、日本のハンセン病史が、現在どのように受容されているかといったことはほとんど明らかにされていない。例外的に、上でも言及した廣川和花（2020, 2021）が、コロナ禍における「隔離」概念をめぐる混乱とハンセン病史における「隔離」認識との関連性を指摘しているが、実際のところハンセン病史がどのように認識・想起され、それによってどのように「教訓」となっているのかといったことを、一般的な言説レベルで分析したものはまだない。

ハンセン病史を教育に取り入れることで、同様の事態を再発させないように啓発的な教育を展開することも提唱されつつある中で（例えば（ハンセン病市民学会教育部会編 2022））、ハンセン病史がどのように「教訓」として認識・想起されているのか検討することは必要なことであろう。

1.3 方法

それではハンセン病史の認識・想起のされ方をいかに探り、それが「教訓」となる

うとしていくプロセスをいかに検討するのか。

本稿ではこの目的を達成するために、コロナ禍においてTwitter上に投稿された文章（以下「ツイート」と表記する）の内、「コロナ」と「ハンセン病」を共に含むものを対象とし、計量テキスト分析ソフトであるKHCoder¹⁾を用いた分析を行うこととする。そうすることでコロナ禍という、「新たな感染症の出現や既知の感染症の再興により」発生した「脅威」（感染症法前文）において、過去の事態がいかに「教訓」とされたのかを見ることとする。より具体的には、「コロナ」と「ハンセン病」が、他のどのような語とどのような文脈で語られたのかを見ることで、「コロナ」という新たな「脅威」を理解し語るために「ハンセン病」という過去の事象がどのように参照されているのかを見る。そうすることで、本稿が問おうとする、過去の諸事象の「教訓」化プロセスの一端が明らかになると考えられる。

なお、Twitterの投稿を分析対象とするのには理由がある。それは、研究の領域ではなくより広く社会的な領域における、歴史の「教訓」化を見ようとする本稿の目的に鑑み、Twitterの投稿を対象とするのが最も効率的であると思われるためである。

ここでツイッターの説明をしておく、TwitterとはTwitter社の提供するSNSサービスで、140字までの短文が投稿可能である。ICT総研による「2022年度SNS利用動向に関する調査」によると、日本のネットユーザーの内Twitter利用者が55.9%となっている。ICT総研の調査はサンプリング調査であり、また無料公開の範囲ではサンプリング方法が不明なため正確さが判断できないが、総務省が実施した調査では、インターネット利用率が82.9%（総務省 2022: 94）となっていることから、日本の人口を約1億2,500万人として計算すると、約5,800万人が利用していることとなる。この数字だとさすがに過大な気もするが、相当数が利用していることは事実であろう。また加えてTwitterには、他者の投稿を自分の周囲に知らせることが可能な仕組みであるリツイート機能などもあり、個人が発した情報や意見を他人の目に触れさせることが比較的容易であること、またそこから議論が喚起されることもしばしばあることから、特定の歴史やその歴史への認識が、個人レベルに留まらず議論され擦り合わせがなされた後に、共有されていく過程を追うことも可能となる。こうした、認識の擦り合わせと共有を追うこともまた、「教訓」化のプロセスの分析に重要となると思われ、この観点からTwitterの投稿を分析対象とした。

ツイートの収集には、Pythonを用いた。また、2019年12月1日から2022年8月31日までの間に投稿されたツイートを対象とする。2019年12月1日時点では新型コロナウイルスが問題化されておらず、当然ながら投稿は存在しないのだが、念のためやや余裕を持たせて収集した。また、ツイッターの仕様上、収集時に非公開となっていた投稿

や、削除された投稿は分析対象には含まれていない。

通常KHCoderを用いた分析では、個々の単語レベルに分解し、それをグルーピングした上で単語やグループ間の関連性を分析し、最終的には元の文章にも戻って分析を行うことが多い。しかし本稿が分析対象とするものがTwitterの投稿である以上、元の投稿文を本稿の中で示すことは、投稿者が特定される危険性を高めてしまう。そこで本稿では、投稿に含まれる単語や単語のグループ同士の関連性の分析までにとどめ、元の投稿文の直接的な分析は——少なくとも個人のツイートの引用は——行わない。このこともここで注記しておきたい。

2 分析

2.1 データの概要

ここからは分析に入る。まずはデータの概要を示すこととしたい。

当該期間中収集されたツイート件数は6,880件であった。なおここには、上述のように非公開ツイートや削除されたものは含まれない。またKHCoderによると、総抽出語数は409,278語で、異なり語数は19,485語であった。

まず、全体として頻繁に使われた、頻出上位40語を以下に示す。

表1 頻出40語²⁾

語	出現回数	語	出現回数
ハンセン病	7,796	学ぶ	509
コロナ	5,821	療養	508
差別	3,887	考える	506
感染	3,165	強制	497
コロナ	2,017	病気	480
患者	2,006	見る	473
隔離	1,968	繰り返す	462
新型	1,795	ニュース	456
ウイルス	1,243	政策	435
人	1,236	新聞	385
思う	1,120	侵害	379
今	850	国	375
問題	846	月	362
人権	818	年	351
歴史	798	知る	349
日本	776	医療	346
言う	727	家族	343
対策	671	過去	343
偏見	663	検査	329
社会	531	話	319

以上のように、まずこの表からだけでも、コロナ禍においてハンセン病が想起される際は、その「差別」や「隔離」、「偏見」といった、感染症法でも指摘されたような語と共に言及がなされることが分かる。また、「歴史」や「過去」といった語を見るに、それが現在のハンセン病問題ではなく歴史的な過去の問題が、かつ「学ぶ」「繰り返す」といった語からは、ハンセン病問題から何かしらの「教訓」を汲み取ろうとする投稿がなされていることがうかがえる。

続いて月別の投稿数を見てみると以下の通りとなる。

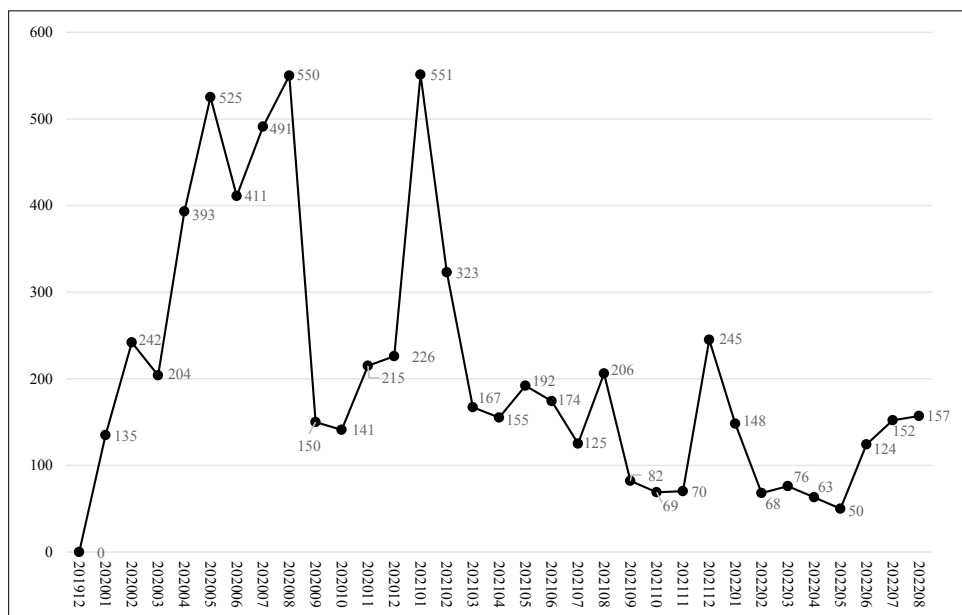


図2 対象期間に投稿された、「ハンセン病」と「コロナ」双方を含むツイート数の変遷

以上のように、コロナ禍においては、コロナウイルス感染症に関連づく形でハンセン病の「歴史」において生じた問題が言及されていること、加えてコロナ禍においては、数の多寡はあれ常にハンセン病への言及がなされていることが示された。ゆえにその意味でハンセン病が何かしらの「教訓」とされていることがうかがえる（結果a）。またツイート数に波があることから、「教訓」とされがちな時期とそうでない時期があること（結果b）の2点がまずこの時点で推測できる結果として挙げられよう。

そこで以下からは、この2つの結果を基盤としながら、さらなる分析を展開していきたい。

2.2 頻出時期についての分析

2.2.1 分析1：ハンセン病の想起頻度は何に影響されるのか

前節で示した2つの結果の内、提示順とは逆になるが、まず結果bを基盤としたさらなる分析を展開することとしたい。すなわち、コロナ禍において、ハンセン病が想起されすなわち何かしらの「教訓」とされる頻度が増減することが前節で結果bとして示されたわけだが、想起の頻度は何に影響されるのか。この分析を行うことで、ある歴史的な出来事が「教訓」とされやすい道筋が析出されることとなり、「教訓」化のプロセスに関する考察も展開しやすくなるだろう。

さて、まずもって頻度に影響を与えるのではないかと推測されるのが、新型コロナウイルスの感染拡大状況であろう。すなわち、現行の問題が厳しいからこそ、過去のことが想起され「教訓」となりやすいのではないかと推測される。そこで月間陽性者数ツイート数との関連を以下で見てみたい。以下の図は、図2に月間陽性者数を描き加えたものである。

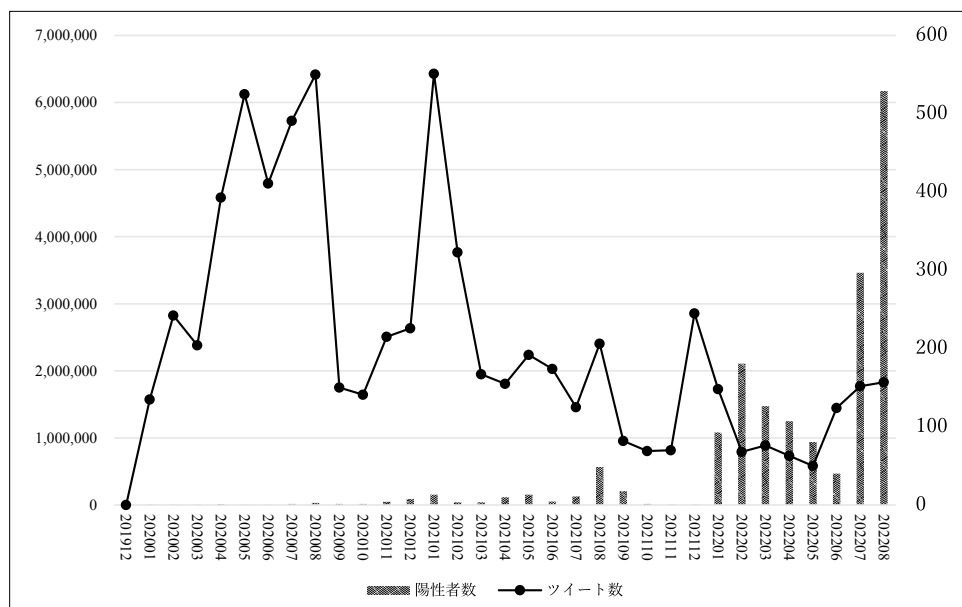


図3 「ハンセン病」・「コロナ」双方を含むツイート数と新規陽性者数の変遷³⁾

棒グラフが新規陽性者数（数値は左軸参照）で、折れ線グラフがツイート数（数値は右軸参照）である。桁が大きく違うため関連性の有無が見出しづらいが、相関係数を算出してみたところ $-0.263^{4)}$ で、有意ではなかった。直感的には、現行の問題の問題性が高い——コロナ禍においては新規陽性者数が多い——ほど、「教訓」化の頻度

——本稿ではツイート数——も高まるのではないかと想定したが、関連はないようである。

それでは何が想起頻度に影響を与えるのか。ここで元データであるツイートに立ち戻って眺めてみたところ、ハンセン病に関する報道を引用・参照しながら自身の意見を付すツイートが散見されるようである。すなわち、やや同義反復的ではあるが、ハンセン病をめぐる報道がなされることが、Twitterという一般の言論空間におけるハンセン病の想起に影響を与えているのではないか。

このことを確認するために、先と同様に、報道数との関連を見てみることにする。結果は以下の図の通りである。なお報道数は朝日新聞クロスサーチより「ハンセン病」をキーワードとして検索したものである。掲載紙や掲載紙面、発行社には特に条件を付けていないため、AERAや週刊朝日の記事もヒットしている。

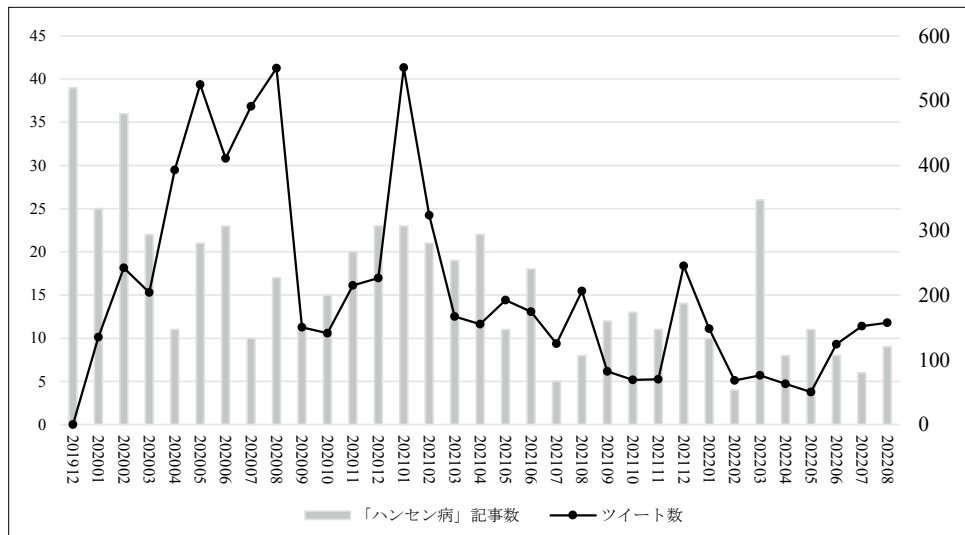


図4 「ハンセン病」・「コロナ」双方を含むツイート数と「ハンセン病」の記事数

これも図3と同じく、棒グラフが記事数（数値は左軸参照）で、折れ線グラフがツイート数（数値は右軸参照）である。相関係数を算出してみたところ.312であり、10%水準で有意であった⁵⁾。すなわち、「ハンセン病」に言及する記事数と、「ハンセン病」と「コロナ」に言及するツイート数の間には正の相関関係があり、一方が多いと他方も多いという状態にある。ここから、「ハンセン病」がマスメディアで報じられ周知されることによって、そのことが現行の問題に道筋を探すための何かしらの「教訓」とされる度合いも高まるという関係がある。

さらに発展的な分析として、「ハンセン病」と「コロナ」双方に言及した記事の数と「ハ

ンセン病」「コロナ」双方を含むツイート数の関連性を見てみたい。すなわち、報道において既に「コロナ」と「ハンセン病」の関連づけがなされており、「教訓」化の端緒が見られるような記事の多寡とツイート数の関係を見るということである。手続きはここまでと同様で、結果は以下の通りである。

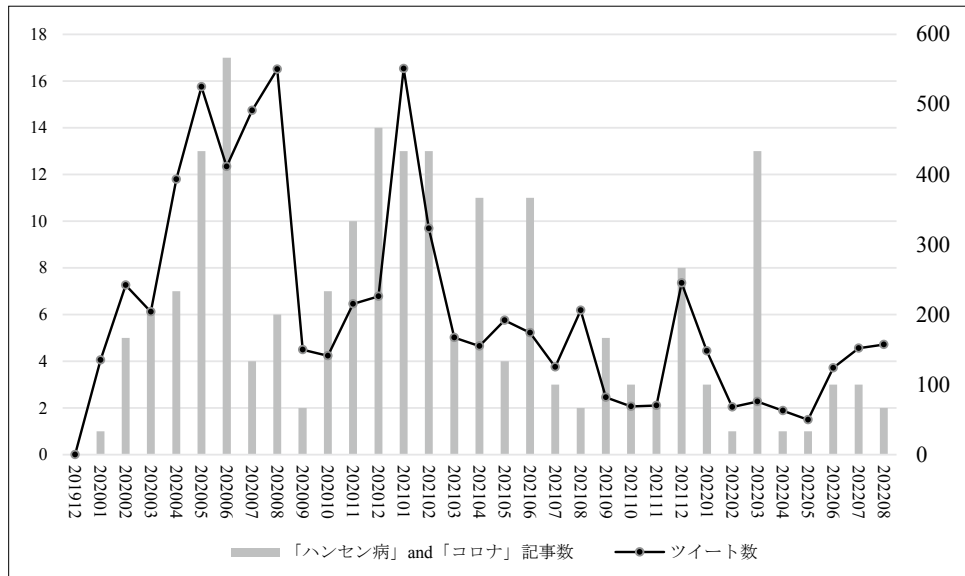


図5 「ハンセン病」・「コロナ」双方を含むツイート数と「ハンセン病」「コロナ」双方を含む記事数⁶⁾

図の示し方も図3、図4と同様である。ここでも相関係数を算出してみると.516であり、1%水準で有意であった。ということはすなわち、単に「ハンセン病」に言及する報道が増えることが「教訓」化を促進するといったことのみならず、「ハンセン病」を現行のコロナ禍において参照されるべき何らかの「教訓」として示す報道が増えることが、Twitterという言論空間における「教訓」化を促進するという示唆される。

つまりは、マスメディアによって“このコロナ禍においてハンセン病の歴史をこのように想起すべきである”という、ハンセン病の「教訓」化を方向付ける枠組みが示され、それに同意するにせよ反発するにせよ、それをきっかけとして、ハンセン病の「教訓」化に関わる議論が展開されていると推察される。ある歴史的事象をマスメディアが提示し、そのことの意味を報道し周知することで、一般にも同様の歴史認識が広まるということであり、当然と言えば当然であるが、ハンセン病の「教訓」化はこのようなプロセスでなされていることが本稿における分析からは示唆された(結果1)。

2.2.2 分析2：コロナ禍においてハンセン病を強く想起させたのは何か

続いて、分析1の延長として、結果bを基盤として、コロナ禍においてハンセン病を強く想起させた出来事の析出を行うこととしたい。

ここまでに見てきた通り、コロナ禍においてはハンセン病に言及するツイートの頻度に多寡が見られた。そのことをもって結果bでは、ハンセン病史が「教訓」とされがちな時期とそうでない時期があることを指摘したが、では「教訓」とされがちな時期に一体何があったのか。

図2以降示してきたように、特に2020年5月（525件）と2020年8月（550件）、また2021年1月（551件）の3つの時期に「ハンセン病」と「コロナ」に言及するツイートが特に多く、月間で500件以上の言及がなされていた。この時期に一体何があったのか。

まず、KHCoderを用いて、各時期の頻出20語を見てみると以下ようになる。

表2 各時期の頻出20語

2020年5月		2020年8月		2021年1月	
語	出現回数	語	出現回数	語	出現回数
ハンセン病	597	ハンセン病	628	ハンセン病	621
差別	406	コロナ	453	コロナ	447
コロナ	368	差別	296	感染	407
患者	225	感染	272	差別	227
コロナ	220	患者	211	隔離	215
感染	178	隔離	200	患者	215
新型	159	新型	163	コロナ	200
隔離	123	コロナ	161	新型	168
人	100	人	109	罰則	168
偏見	94	謝罪	106	入院	141
今	91	ウイルス	103	人権	111
ウイルス	85	玉川	89	強制	106
思う	82	対策	89	改正	100
歴史	65	問題	89	拒否	99
問題	62	思う	87	人	92
繰り返す	61	強制	78	思う	90
重なる	55	放送	78	反対	87
日本	52	徹	69	ウイルス	80
見る	47	モーニングショー	68	声明	78
自粛	46	言う	68	日本	73

どの時期も「ハンセン病」「コロナ」「差別」「患者」「感染」「隔離」といった語が多いのは当然のことであるとは言え、個別に見ると各時期それぞれ特有の語が用いら

れていることが分かる。例えば表2中で下線を引いて示したように、2020年5月であれば「歴史」「繰り返す」「重なる」といった語が、2020年8月だと「謝罪」「玉川」「放送」「徹」「モーニングショー」といった語が、2021年1月だと「罰則」「改正」「拒否」「反対」「声明」といった語が特徴的に使われている。実際にKHCoderで特徴語を抽出してみても、以下のようにこれらの語が各時期の特徴語に含まれる傾向が——単に出現回数が多い語と各時期の特徴語とは意味が異なるので完全に重なるわけではないが——ある。なお表3中の係数はJaccard係数であり、1に近いほどその時期に特徴的に使われている語であると言える。また表2で下線を引いた語は表3でも同様に下線を引いている。

表3 各時期の特徴語

2020年5月		2020年8月		2021年1月	
語	係数	語	係数	語	係数
差別	.084	ハンセン病	.076	罰則	<u>.117</u>
患者	.074	コロナ	.072	入院	.098
ハンセン病	.071	患者	.068	感染	.086
コロナ	.063	謝罪	<u>.067</u>	ハンセン病	.073
新型	.056	感染	.067	コロナ	.069
偏見	.052	隔離	.064	拒否	<u>.069</u>
今	.046	玉川	<u>.063</u>	患者	.069
重なる	<u>.042</u>	新型	.057	改正	<u>.066</u>
人	.040	バリ	.051	反対	<u>.062</u>
繰り返す	<u>.037</u>	放送	<u>.050</u>	強制	.062

それではこうした語は、どのようなツイートで用いられていたのか。投稿者の特定ができない範囲で元ツイートを参照しながら見ていくこととしたい。

まず2020年5月の「歴史」「繰り返す」「重なる」である。これらが用いられたツイートを検索すると、コロナ禍において「ハンセン病の歴史を繰り返さぬよう過去を想起すべき」といった趣旨の、まさに「教訓」化を提唱するツイートも多いのだが、目に留まるのが、「コロナ罹患者の『今』に重なる隔離の悲劇 ハンセン病の歴史に学ぶ」という西日本新聞で配信された記事にリンクをし、それにツイート主がコメントを付して投稿するタイプのツイートと、「ハンセン病の過ち繰り返すな 内田博文・九州大名誉教授」というやはり西日本新聞で配信された記事にリンクをし投稿されたツイートである。つまりは、結果1で示唆されたことと同様、マスメディアが「教訓」化の枠組みを提示し、それに依拠する形で投稿するタイプのツイートがこの時期多かつたために、「ハンセン病」を想起するツイート数を増加させたと思われる。

これは2021年1月も同様である。「罰則」「改正」「拒否」「反対」「声明」の語が含まれたツイートを見てみると、それらは、この時期見られた、入院・検査拒否者に罰則を科すことができるようにしようとする法改正の動きに対し、日本医学会連合・日本公衆衛生学会・日本疫学会が反対の声明を出したことについての報道を参照した上で投稿されたものがほとんどであるということが分かる。これらの声明の中で、本稿でも参照した感染症法前文への言及がなされており⁷⁾、ハンセン病史を「教訓」とすべきとの提唱がなされたことが報道されたために、ツイッター上でも同様の投稿が頻出したということである。

以上のように、マスメディアが示した「教訓」化の枠組みに依拠し、それと同様の主張が、言い換えもなされながらツイッター上で投稿され、ハンセン病史が特定の形で「教訓」とされていく流れが発生したと言える。

他方、2020年8月はやや異なる形でハンセン病について言及するツイートが頻出することとなった。頻出語が「謝罪」「玉川」「放送」「徹」「モーニングショー」であり、これを見ただけでおおよそ推測はつくかもしれないが、テレビ朝日系列で放送されているモーニングショーという番組における、出演者の玉川徹氏の発言とその謝罪をめぐるツイートにおいて「ハンセン病」という語が頻出したわけである。では玉川氏の発言と謝罪はどのようなものであったのか、念のためここで確認しておこう。やや扇情的な記事ではあるが、テレビ番組や出演者をめぐって起きた出来事をまとめるサイトである、JCASTテレビウォッチがまとめたところによると、以下のようになる。

テレビ朝日のコメンテーター玉川徹氏が6日（2020年8月）、同局の情報番組「羽鳥慎一モーニングショー」で、PCR検査の拡充についてハンセン病問題を引き合いに出し、ハンセン病の元患者たちを傷つける結果になってしまったと、約4分間にわたって謝罪した。7月23日の放送で、玉川氏は自身が進めるコーナー「そもそも総研」の中で、「なぜPCR検査はいつまでも増えないのだろう」というテーマで放送した。新型コロナ対策分科会のメンバーのインタビューを中心とした企画だった。その中で玉川氏は、PCR検査で疑陽性者が出てしまうと、その人たちの人権侵害に繋がりがかねない厚生労働省の専門家が考えて検査の拡充が進んでいないのはいいか、その背景に過去のハンセン病裁判の人権侵害の認定が影響しているのではないかという見解で放送した。この放送内容に元患者と支援者の2団体が抗議し、テレビ朝日に謝罪を求めていたのだった。玉川氏は「そもそも総研」の最後に、「ハンセン病裁判を長年戦ってきた方たちの存在や裁判自体がPCR検査を増やす障害になっているのではないかという誤解を招きかねないものだったと思います。そもそ

も、今回私も勉強して分かったのですが、新型コロナウイルス対策とハンセン病患者の隔離政策は全くの別問題です。元患者の方や関係者の方を傷つけることになってしまい、深くお詫びしたいと思います。申し訳ありませんでした」と、謝罪したのだった。ネット上では、「玉川氏はちっとも反省していない」と批判の声があふれている。(JCASTテレビウォッチ 2020)

すなわち、玉川徹氏が、PCR検査抑制傾向があることを指摘した上で、そうした社会的な傾向には厚生労働省の判断が影響を与えており、かつそれが過去のハンセン病国賠訴訟での国の敗訴の経験から導き出されているのではないかと推測を行い⁸⁾、そうした推測に当事者団体から抗議がなされたということである。それを受け玉川氏は謝罪をしたが、謝罪をしたことに対して、謝罪に誠意がないと——JCASTと同様の論調で——批判する投稿や、ハンセン病は感染力が弱く新型コロナウイルスと同列視することが間違っているとする投稿、あるいは、玉川氏の推測は元々厚労省の元技官が発言したことに基づいていると指摘する投稿が繰り返され、言うならば「炎上」状態が発生したわけである。また特にこの炎上は、先に引用したJCASTもそうだが、何かしらの出来事の論点をまとめ、認識の方向性を水路づける、いわゆる複数の「まとめサイト」が関与したことで大きく燃え盛った⁹⁾。加えて、「玉川」「徹」という固有名詞がこの時期特徴的に使われていることから——かつ、2020年5月や2021年1月には報道に登場した人物名¹⁰⁾ が特に頻出してはいないことから——うかがえるように、社会的に注目を集め、かつ人々の言及対象とされやすい人物の発言であったことも原因なのであろう。

このように、マスメディアに限らず、まとめサイトのような、特にネット上での意見や認識を水路づけ、人々に提示する別種のメディアが、ハンセン病史の想起に寄与していたことも見えてくる。価値判断を除いて言うならば、こうした、炎上による歴史の想起も、現在発生している事態の認識とその対策を過去の出来事から汲み取ろうとする点で——それがこの玉川氏の「炎上」のように、「過去の出来事を現在起きていることの理解に用いるのはおかしい」とか「現在起きていることは過去のことと違う」といった形であれ——「教訓」化がなされようとしているものであると見なせよう。ツイッター上での投稿を分析対象としていることに起因する部分も大きいと思うが、歴史の「教訓」化にはまとめサイトのような別種のメディアによる報道であることも寄与することがこの分析からは見えてきた(結果1')。

2.3 「教訓」化の分析

2.3.1 分析3：「教訓」とされるのはハンセン病史のどの部分か

前節までは、「ハンセン病」を含むツイートが多く投稿された3つの時期に注目し、それが何によって導かれたのか分析した。続いてここからは、本稿が対象とする時期全体に注目し、「教訓」化のあり方とその変遷を見てみることにしたい。

分析1と2で見たように、ハンセン病史がコロナ禍において「教訓」化されていることは、程度の差はあれ一貫していた。しかし同時に、結果1'として析出されたように、「教訓」化される際の機序がそれぞれ異なる可能性もうかがえる。すなわち、「教訓」化されたことは一貫しているにしても、どのように「教訓」化されどのような「教訓」が導き出されたかは状況によって異なることが既に示唆されている。そこでこのことを詳細に分析するために、類似する語をまとめるコーディング作業を加えた上で、それぞれのコードがどのように用いられているのかを見てみたい。

まずコーディングのルールを示すと、以下のようなものとなる。「*」に続くものがコード名で、そのコードに含まれる語が続く行に記載されている。各語は実際のツイートを見ながらコード化を行った。それぞれの語が出現した場合に、それが含まれるコードがカウントされるというわけである。なお以降、図表を除く文中では、コードを鍵括弧でくくって表記することとする。

表4 コーディング・ルール

*ハンセン病関連 ハンセン病 訴訟 予防法 療養所 愛生園 全生園 恵楓園 長島愛生園 菊池恵楓園 多磨全生園 施設 国賠 多摩 邑久光明園 星塚敬愛園 星塚敬愛園 沖縄愛楽園 元患者 大島青松園 愛楽園	*教育 教育 学習 学校 学ぶ 啓発 啓蒙
*コロナ関連 コロナ COVID COVID-19 SARS-CoV-2	*問題 被害 問題 悲劇
*差別・偏見 差別 偏見 中傷 排除 村八分 侵害 誹謗 バッシング	*メディア 新聞 テレビ メディア テレ朝 朝日 日テレ テレ東 産経 読売 毎日 報道 放送 モーニングショー 映画 記事 番組 毎日新聞 朝日新聞 産経新聞 読売新聞 東京新聞 バリバラ 玉川徹
*治療法 治療法 ワクチン 薬	*他の病気 エイズ HIV 結核 コレラ 水俣病 インフルエンザ 風邪 ペスト 後天性免疫不全症候群 AIDS HIV/AIDS マラリア
*うつる 感染 伝染 経路 うつす うつる	*容認 容認 仕方 必要

*治る 治る 治癒	*同じ 同じ 同一 似る 類似 似通う 酷似 相似 近似 重なる 並べる
*強制 強制 無理やり 強引 強いる 強要	*違う 違う 異なる 差異 異質
*政策 政策 法律 対策 法 憲法	*正しい 良い 正しい
*科学・知 科学 知識 知 医学 学者 専門 医師	*悪い・誤り 悪い 誤る 誤り 誤解 悪 過剰 やりすぎ 害
*教訓 教訓 検証 踏まえる ふまえる	*隔離 隔離 隔絶
*歴史 過去 歴史 記憶	*療養 療養 入院
*想起 反省 悔い 後悔 顧みる 思い出す	

まず、コードごとの出現頻度を表で示す。以下の通りである。

表5 コードごとの出現頻度と割合（分子と分母は段落＝ツイートを単位とする）

コード	頻度	割合
*ハンセン病関連	6,880	100.0%
*コロナ関連	6,880	100.0%
*差別・偏見	3,220	46.8%
*治療法	232	3.4%
*うつる	2,339	34.0%
*治る	77	1.1%
*強制	483	7.0%
*政策	1,146	16.7%
*科学・知	568	8.3%
*教訓	266	3.9%
*歴史	1,089	15.8%
*想起	327	4.8%

コード	頻度	割合
*問題	955	13.9%
*メディア	1,370	19.9%
*教育	671	9.8%
*他の病気	868	12.6%
*容認	268	3.9%
*同じ	391	5.7%
*違う	259	3.8%
*正しい	274	4.0%
*悪い・誤り	399	5.8%
*隔離	1,477	21.5%
*療養	621	9.0%

続いて、これらのコードの出現頻度を時系列で見ると、以下の通りとなる。

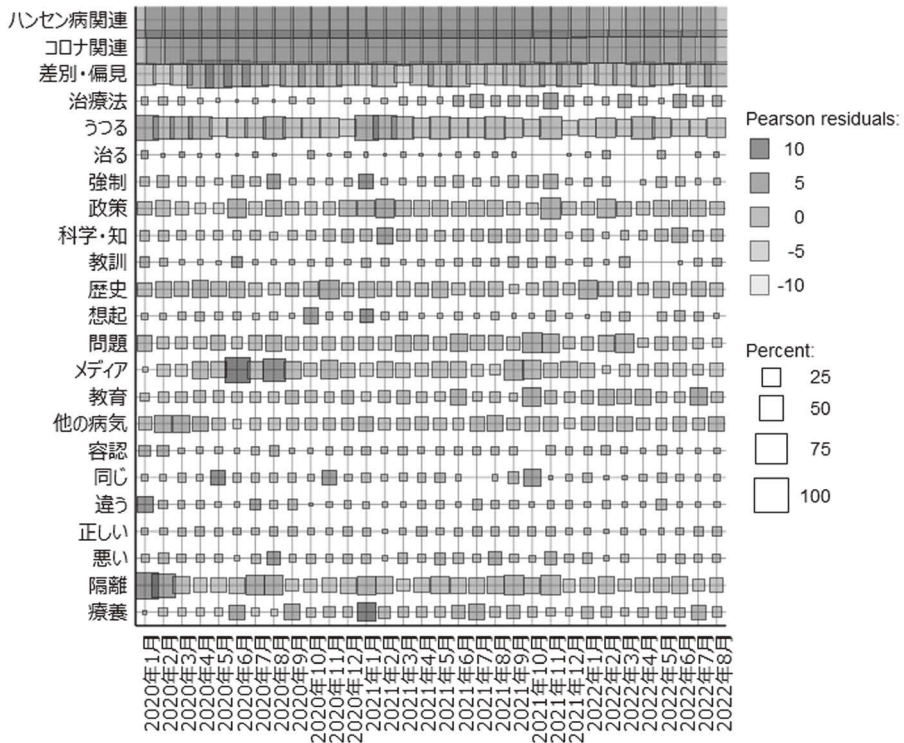


図6 各コードの出現頻度の変遷

この図から見てとれることはいくつかあろう。たとえば、「うつる」「政策」「歴史」「差別・偏見」「隔離」をめぐるコードは常に一定頻度使用されており、ハンセン病がコロナ禍において想起され「教訓」とされる際には、それが、「感染」/「政策」/「差別・偏見」/「隔離」の問題を論じる際に参照されるべき「歴史」的事象として理解されていたことがうかがえる。この点においてまず、ハンセン病が「教訓」とされる際には、感染」/「政策」/「差別・偏見」/「隔離」の4点が参照されるべき論点と理解されていることが分かる（結果2）。

2.3.2 分析4：「教訓」はどのように「教訓」とされるのか/されないのか

他方、出現頻度が時期によって異なるコードもある。特に本稿の主題に鑑みて注目して値するのが、「同じ」「違う」コードが、特定の時期に特徴的に頻繁に出現している。こうした出現頻度の増減は、論点先取にはなるが、ハンセン病がコロナ禍において「教訓」として持ち出される際に、ハンセン病と新型コロナウイルス感染症が「同じ」なのか「違う」のか、すなわち「教訓」とされることが適切なのかそうでないのかをめぐってツイートの量を反映しているものだと思われる。そのため以下では特にこ

の「同じ」「違う」コードの用いられ方を見てみたい。

まず「同じ」コードである。特に2020年5月、2020年11月、2021年10月にこのコードの出現頻度が高まっている。ではこれらの時期にどのように「同じ」であると語られたのか。ここでも、元投稿が分からないようにこの時期見られたツイートを要約する形で示してみたい。

表6 「同じ」コードを含むツイート

時期	「同じ」コードを含む当該時期の典型的なツイート（要約）
2020年5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンセン病と同じ過ちを繰り返さないように人権問題としてコロナ禍に向き合おう ・ハンセン病と同じ未知の感染症に向き合うために、差別偏見は繰り返さないでほしいと思う ・ハンセン病のような人権問題を起こした我々。コロナ禍で同じ過ちを繰り返さないと言えるだろうか
2020年11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンセン病患者が国にされたことを見つめ直さないと、また同じことが起こってしまうかも ・コロナ禍では、ハンセン病と同じで感染力がなくても隔離している ・コロナとハンセン病、重なる記憶「人間弱くなったかな」（朝日新聞の記事の引用）
2021年1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンセン病の国賠訴訟は隔離による人権侵害で国が負けた訴訟。コロナも同じだから訴えましょう ・コロナとハンセン病ってなんとなく似てるよね ・PCR検査拡充をメディアが主張するが、検査は「隔離」とセット。隔離って陽性をエンガチョするわけで、ハンセン病差別と同じ轍を踏むということ。

以上は典型的なツイートを要約したものではあるが、これらの時期における「同じ」コードの特徴的頻出は、特に差別／隔離といった、過去には国賠訴訟の要因となったようなことと「同じ」事態がコロナ禍で招来していると認識し、そのことに危惧の念を示すためであったと思われる¹¹⁾。

他方、「違う」コードが頻出した2020年1月の典型的なツイートを要約すると以下のようなになる。

表7 「違う」コードを含むツイート

時期	「違う」コードを含む当該時期の典型的なツイート（要約）
2020年1月	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスはハンセン病、後天性免疫不全症候群等とは感染スピードが違う。一緒に語ってはいけない。「人権」も勿論大切だけど今は「人権」<「人命」で個別具体的な対応をすべき ・コロナウイルスとハンセン病、後天性免疫不全症候群では訳が違う。ハンセン病は伝染りやすいわけでもないのが分かってたのに強制隔離したのが問題 ・そもそもハンセン病の隔離は明らかにやりすぎだった。コロナウイルスに対する隔離は、やるとしてもハンセン病のそれとは全く違う形になるでしょ

これも「同じ」ツイートと同様に典型的なツイートを要約したものであることに注意は必要だが、この時期の「違う」コードは、差別／隔離といったハンセン病史における問題を理解した上で、新型コロナウイルス感染症の方がハンセン病よりも感染力が高く、それをコロナ禍に適用して理解することは「違う」のであり、「隔離」はやむを得ないとする論理の下で頻出していたと思われる。

すなわち、「同じ」コードも「違う」コードもともに、ハンセン病史における差別／隔離のことを問題として認識している点では同一で、すなわちいずれも「教訓」となりうることを理解した上で出現したものである。しかし同時に、それをコロナ禍に当てはめるべきかそうでないかといった「教訓」化の妥当性を巡る判断が異なっており、2020年1月は「違う」＝妥当でないと、2020年5月と11月、2021年1月は「同じ」＝妥当であるとしていることがうかがえる（結果3）。

3 考察

さて、本稿でここまで得られた分析結果をまずはまとめておきたい。

まず本稿では、程度の差こそあれ、コロナ禍において、ハンセン病が何かしらの「教訓」とされてきたこと（結果a）、「教訓」とされがちな時期とそうでない時期があること（結果b）を基礎的な結果として導き出した。その上で、特に結果bを下敷きに、ハンセン病史を「教訓」化する枠組みがメディアで報じられたことにより同様の理解の枠組みが一般にも方向づけられること（結果1）、またその際、まとめサイトのような従来型のメディアとは異なるメディアも寄与すること（結果1'）、ハンセン病史が「教訓」とされる際には、感染／「政策」／「差別・偏見」／「隔離」の4点が参照されるべき論点と理解されていること（結果2）、しかしそれを現在生じている事態を理解し解決策を講じるための「教訓」とするかどうかの妥当性の判断が、状況によって変わる（結果3）を導き出した。

それでは以上から、「教訓」化をめぐるどのような示唆が得られるのか。

第1には、歴史が「教訓」化されるか否かは、メディアが取り上げるかどうかに影響されるということである。加えてまた、「教訓」化されるとしてどのように「教訓」とされるかも、メディアが先行して設定した理解の枠組みによって影響されるということである。すなわち、特定の歴史が後代に想起される程度や、想起の方向性は、歴史そのものの性質にのみ依存するわけではなく、その時々メディアがいかに取り上げるかといった部分にも相当程度依存している。

第2には、「教訓」化の妥当性は、それが「教訓」として参照される現状に対する認識と連動して判断されるということである。すなわち、ある歴史が「教訓」とされる

こと自体が妥当だと認識されていたとしても、それを「教訓」として現状に適用することが妥当かどうかは、現状に対する認識によって左右される。コロナ禍において、当該問題がまだよく分かっていなかった2020年1月にはハンセン病史を「教訓」とすることが妥当とされず、その後は一転して妥当視されるようになったことが、このことを示唆している。ある歴史を「教訓」とすること、すなわち、“過去に起きたことと同様だ”と見なすことは、現在生じている問題への理解を、特定の道筋——経験済みの歴史的事象に関する理解の枠組み——によって理解することである。すなわち、未知の事態を既知の事象で類推的に理解することは、未知の事態の予見の難しさを減じていくことでもある。それは裏返せば、予見の幅を狭めることにもつながり、“もしかしたらこういうことが起きるかもしれない”という心構えを減らすことにもなる。したがって、まだ問題が生じて間がなく、“何が起こるかまだよく分からない”状況では、歴史を「教訓」として現状認識に適用してしまうことで、問題の予見可能性を狭めていいのだろうかという危惧が働くのであろう。「教訓」は、未知の事態の展開を予見させてくれるものであるが、それは同時に、それ以外の展開の可能性を薄めてしまうものでもある。“何が起こるかまだ分からない”といった状況では、過去の事象を「教訓」化することは両刃の刃となりうる。

このように、本稿における分析を通して、ある歴史が「教訓」化される際のプロセスの一端が見えてきた。

4 おわりに

本稿で注目したハンセン病のように、ある歴史——それも多くは問題含みの歴史——が、現在生じている事態を理解し、それへの対策を導き出すものとしての「教訓」とされることはしばしばある。また感染症法で示されたように、「教訓」としていくことが求められることもある。

しかし本稿で示してきたように、歴史を「教訓」とすることはそれほど単純なプロセスでなされるものではない。どういった歴史が「教訓」とされるべきものとしてピックアップされ、それを「教訓」として用いるための枠組みがどのような主体によってどのように提示されたのかといったことを考慮すると、「教訓」化のプロセスにはさまざまな力学が働きうる。また加えて、歴史が「教訓」とされるかどうかは、「教訓」の内容のみでなく、それが適用されようとする現状への認識によっても左右される。

またさらには、廣川和花（2020, 2021）が指摘するように、ハンセン病史等における「隔離」問題が「教訓」化されることで、隔離という概念そのものの認識に——例えばある者はハンセン病史等を参照しながら「隔離」を論じ、別のものはそうでない

辞書的な「隔離」を論じ…といった形で——混乱が生じ、コロナ禍における隔離をめぐる議論を複雑にしてしまった側面もある。特定の歴史的な脈における概念や用語法が「教訓」として拡大し共有されたことで、本来の概念や用語法が変容し、議論を困難にしてしまっている実態がある。あるいは、ハンセン病史への注目が「教訓」とされがちの部分に集中してなされ、あまり「教訓」とはなっていない歴史——たとえばハンセン病療養所における自治の歴史や、病者運動の歴史、病者の生活史など——が、忘却されてしまうこともある。本稿の分析から直接導き出されることではないが、ある歴史の特定部分が「教訓」となることで、それ以外の部分が顧みられにくくなることもある。

こうした点から考えると、現在様々な面で見られるハンセン病史を「教訓」としようとする動き（ハンセン病市民学会教育部会編 2022）は、そのこと自体の重要性は認められた上で、「教訓」化のプロセスを適宜検討しながら進められるべきであると思われる。こうした、「教訓」化をめぐる現状への示唆もまた、本稿から汲み取られるべきものであろう。

注

- 1) 樋口耕一が開発した、テキストデータを計量分析するためのフリーソフトである。大量のテキストデータからデータの構造を発見することに力を発揮し、また、分析プロセスを明示しやすい（＝二次分析や分析の検証を行いやすい）ことに大きな利点を持つソフトである。
- 2) なお、理由は分からないが、「コロナ」が2種カウントされていることに注意が必要である。以降の分析でも同様である。
- 3) 月間の新規陽性者数を図示している。データは厚生労働省のオープンデータ (<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>) より。
- 4) なお、陽性者も確認されておらず、対象ツイートも存在しない2019年12月については相関係数の算出時には除外している。
- 5) 注4に記載したことと同様、2019年12月は計算から除外した。
- 6) 注4注5に記載したことと同様、2019年12月は計算から除外した。
- 7) 例えば日本医学会連合の声明はhttps://www.jmsf.or.jp/news/page_822.htmlである。
- 8) もう少し詳細に言うと、PCR検査で擬陽性者が出て様々な制限が課された場合、それが人権侵害となり、ハンセン病等の国賠訴訟と同様国の問題とされないか…と国側が危惧をして検査抑制をしているのではないかという発言だったようであ

る。

- 9) なおまとめサイトについては、編集しまとめる主体の意図がどうしても入ってしまい、特定の観点から重視する発言が強調されて示される傾向があり、そのため「炎上」を誘発するようなものがしばしばあることが指摘されている（平井 2021）。もちろんマスメディアであっても不偏不党ではありえないのだが（荻上 2017）、重点の置き方がマスメディアとまとめサイトでは異なる（平井 2021: 62-75）。
- 10) 例えば、本文中でも述べたように、2020年5月に多く参照されている報道記事の1つには、ハンセン病問題検証会議の副座長を務めた内田博文九州大学名誉教授のインタビューが掲載されたものがあり、見出しにも同氏の名があるのだが、特徴的な語として同氏の名が挙がっているわけではない。やや雑な物言いではあるが、識者の発言と有名人の発言とでは、注目のされ方や注目する部分が異なってくるようにも思われる。
- 11) もちろん、「同じとは見なせない」といった形で、全く逆の意味で「同じ」コードが用いられる場合もあるが、傾向としてはそれほど強いものではない。

文献

- 青山陽子, 2014, 『病いの共同体——ハンセン病療養所における患者文化の生成と変容』新曜社.
- 蘭由岐子, 2017, 『「病いの経験」を聞き取る〔新版〕——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社.
- 有菌真代, 2017, 『ハンセン病療養所を生きる——隔離壁を砦に』世界思想社.
- 藤野豊, 1993, 『日本ファシズムと医療——ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店.
- , 2001, 『「いのち」の近代史——「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版.
- JCASTテレビウォッチ, 2020, 「テレ朝『モーニング』玉川徹、『PCR検査放送でハンセン病元患者を傷つけた』と謝罪 ネット上では『ちっとも反省していない。謝罪後にゲラゲラ笑っていた』と怒りの声」(2022年11月1日取得, <https://www.j-cast.com/tv/2020/08/06391722.html?p=all>).
- ハンセン病市民学会教育部会編, 2022, 『ハンセン病問題から学び、伝える』清水書院.
- 平井智尚, 2021, 『「くだらない」文化を考える——ネットカルチャーの社会学』七月社.
- 廣川和花, 2011, 『近代日本のハンセン病問題と地域社会』大阪大学出版会.

- , 2020, 「ハンセン病『隔離』とは何か」『現代思想』48(7): 163-169.
- , 2021, 「『隔離』と『療養』を再考する——COVID-19と近代日本の感染症対策」『専修人文論集』109: 235-56.
- 猪飼隆明, 2016, 『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』校倉書房
- 厚生労働省, 2022, 「データからわかる——新型コロナウイルス感染症情報」(2022年10月27日取得, <https://covid19.mhlw.go.jp/>).
- 桑畑洋一郎, 2013, 『ハンセン病者の生活実践に関する研究』風間書房.
- 松岡弘之, 2020, 『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房.
- 中村文哉, 1997, 「沖縄におけるハンセン病問題——その生活誌からみるもうひとつの沖縄」『立命館大学人文科学研究紀要』68: 259-291.
- , 2010, 「屋部〈隔離所〉時代の青木恵哉——〈自由の地〉として〈もう一つのシマ社会〉を拓く営み」『山口県立大学社会福祉学部紀要』16: 11-28.
- , 2012, 「シマ社会に挑む〈闘う病友たち〉と青木恵哉——大堂原「占拠」の展開と顛末」『山口県立大学社会福祉学部紀要』18: 21-54.
- , 2020, 「愛楽園開園以前の沖縄ハンセン病者たちの現実と青木恵哉」『解放社会学研究』33: 71-94.
- 荻上チキ, 2017, 『すべての新聞は「偏って」いる——ホンネと数字のメディア論』扶桑社.
- 坂田勝彦, 2012, 『ハンセン病者の生活史——隔離経験を生きるということ』青弓社.
- 新村出, 2018, 『広辞苑 第七版』岩波書店.
- 鈴木陽子, 2020, 『「病者」になることとやめること——米軍統治下沖縄におけるハンセン病療養所をめぐる人々』ナカニシヤ出版.
- 山田富秋, 2020, 「沖縄におけるインテグレーション政策の試み——犀川一夫医師に着目して」『解放社会学研究』33: 48-70.